

2度目、3度目の イタリアの旅のために

—イタリアの地方の魅力に触れる個人旅行の勧め—

石坂 尚武 (大学文学部教授)

はじめに

私はこれまで色々なタイプの旅をしてきた。大学では西洋文化史を担当しているので、まず、その講義の教材に使うビデオ作成のために、教会美術を中心にヨーロッパの各地を回ってきた。例えば、ゴシック建築のことを話す場合は、フランスやスペインやドイツで実際に撮影した数多くの建築を見せる。また、そうした仕事に関係した旅のほかにも、純粹に興味の旅もしている(例えば、日本の温泉巡りなど)。しかし、私にとって特に大きなウェイトを占めたのが、日本の内外の山旅である。

私の生涯で最も心に残る旅は、何と言っても、氷河を一步一步踏みしめて制覇したヨーロッパ・アルプスの最高峰モンブラン(4810m)の山旅である。しかし、この登山では、登頂を終えて下山する時に、勢い余って岸壁に体当たりしてしまい、胸を強打し、肋骨を折ってしまった。また、絶壁を命がけて岩登りしたマッターホルン(4477m)の山旅も忘れがたい(図1)。疲労困憊から、マッターホルンの頂上直下のソルヴェイ避難小屋に緊急避難



図1 マッターホルン登山
ヘルンリ稜から登攀。朝、寝坊をして出発が遅れたために、先行するパーティーが多く順番待ちで岩稜で長く待たされてしまった

的に逃れ、仲間を待った長い時間が忘れられない(——なお、私がマッターホルンを下山した翌週に、日本人二人の滑落による死亡事故があった。この他、ユングフラウやブライトホルンにも挑戦した。また、アフリカ大陸最高峰のキリマンジャロ(5895m)の山旅は、高度によって熱帯気候や亜熱帯、砂漠気候と大きな変化を体感してようやく頂上の氷河に至る息の長い山旅であった(文学部文化史学科の武藤直先生と同行)。ホロンボハッ

ト(小屋)(3780m)では、真夜中にあまりの寒さで目覚めて寝袋内の温度を測ると0度であった一方、この寒さと対照的なのが、真昼の赤道直下の燃えるような灼熱だった。また、マレーシアのボルネオ島にあるキナバル山(4101m)はカメレオンやオランウータンを見ながら登山。登山前と登山後の、優雅なインペリアル・スタイルのホテルとは対照的に、最終日は、頂上直下の小屋を朝4時に出て、夕方4時までほとんど休まず進む厳しい山旅であった。これは本格的な海外登山に体力の限界を感じた山旅でもあった。

しかし、そもそも、海外の山の迫力に圧倒されたのは、今から40年前、大学院を出た年、イタリアのヴェネト州にある中世の城で開催された夏季イタリア語講習会に参加した時のことであつた——そのエクスカッションで見たイタリアのドロミテ渓谷のミズリーナ湖とそこに映えるトレ・チーマ・ディ・ラヴァレード(2999m)の威容は、まことに圧巻だった。大学教員として中近世のイタリアの黒死病を研究している私は、その一環として、2000年から17年間、毎年欠かさずに、イタリアの諸地方を回って「疫病

06年(図2)。この時、私の勤める大学(同志社大学)が、キリスト教理念にもとづいて創設された大学だということも、イタリア人には特に親しみと好感を与えたようである。



図2 イタリアの雑誌での石坂の紹介記事
何と、右上は同志社女子大学! 雑誌の取材者が私の所属の大学の写真をほしいというので京田辺校地の正門の前の写真を送ったら、その背後の同志社女子大学の鐘楼が大きくトリミングされアップされてしまった

旅行のタイプのあり方

個人旅行、

特定地域の旅の初め

海外旅行については、新聞の広告欄でしばしば大きく宣伝されている。旅行会社が企画し現地を案内してくれる団体旅行は、宿泊するホテルや食事が最初からしっかりと設定されていて、身を委ねれば、気楽に旅行が楽しめる。スケジュールに従って、あちこちに広域に散らばる都市を次々と回ってくれるものである。料理の「ごちそう」だけでなく、まさに観光的な「ごちそう」が次々と並んで我々を飽きさせない。現地の周遊もバスや飛行機などを活用し、移動がスムーズで合理的である。かなり離れた地点へも——例えば、ヴェネツィアからローマ、ナポリ、パレルモと——一気に移動する。それどころか国もひとつにとどまらず、2つも3つもまたいでしまうものもある！限られた日数のなかで、なかなか食欲な旅である。それでいて料金は、団体旅行ということから、比較的安価である。

イタリアの旅行について、こうした広域に及ぶ、いくつかの主要な地点を網羅す

る団体旅行の良さを否定するつもりはない。もし一生に一度だけしかイタリアに行けないなら、それもいいかもしれない。しかし、それは日本では、札幌から仙台、次に東京、京都、長崎をひとつの旅で網羅して回るようなものである（日本がそれで理解されてたまるか、という気もする）。一方、私が勧めたい旅は、ある地方に絞って、そこにたえず小さな町を中心に、ゆつくりとマイペースで回る個人旅行である。イタリアを「点」で見るとではなく、「面」で見るとである。その地域において直接肌で感じる空気と風土がある。そこでは地方文化（食文化、絵画・教会様式など）が息づいている。この旅は離れた大きな都市を次々と網羅するのではなく、人口数千人から数万人の、近接する中世的な装いの町を回る旅である。

そこには、石造りゆえに、また、地方ゆえに、近代化・工業化とは無縁に、ひっそりと残存し得た古い家々と町がある。ここは、中世・ルネサンスの世界が息づいている。そこでは電信柱やテレビのアンテナは意識的に隠されている。一方、大都市のローマやフィレンツェは首都機能を備えたために、また、ミラノは商業

機能を備えたために、否応なしに機能的な近代建築に毒され、純粹に古い景観はかなり損なわれている。しかし、古代ローマ帝国が滅んでから、イタリアの「中心」はずっと「地方」にあった。地方が中心であつたことのパラドックスは、古きものに命を吹き込み、我々に新鮮なカルチャー・ショックを与える。この旅はそうした地方のぬくもりに触れるタイム・スリップの旅である。

この地方の旅は（不便だが）安全性が高い——スリやテロは考えにくい。この旅は、団体旅行のように、次々と大都市や観光の目玉を集団で導かれるままに進むのではなく、個人で気ままに自主的に進む旅である。一方大都市の魅力は、その富によつて集めた多くの名品を所蔵する美術館のすばらしさにある。私はミラノについては個人的に格別の親しみを持っており、かなり詳しいつもりでいるが、ここには観光的魅力は乏しい（せいぜいドゥオモとお城とレオナルド・ダ・ヴィンチの《最後の晩餐》くらいか）。だが、何より素晴らしいブレラ美術館がここに燦然と輝いている。

中部山岳地帯の市壁の町を巡る旅

このお勧めの旅では、ローマ空港（ふつう夕方に着く）から電車でローマ市内に出て、ローマでは1泊だけして、翌朝素早く脱して北へ進む。主としてウンブリア州とトスカナ州（ローマ、フィレンツェ間）を回る旅である（地図）。その多くは丘陵地帯に位置し、市壁（城壁）に囲まれた小さな山岳都市である。キオ

スク（エディーコラ）で時刻表を買い、電車やバス（時にタクシー）で少しずつ北上して進む。次に列挙するどの町も魅力的な珠玉の町なので、現地の電車やバスの具合で、その日、乗り物の都合で行きやすい町へと、スキップして進んだら良い。ここで挙げるルートは一例である（鉄道の路線が異なるのでこのままでは行きにくい）。交通の便でやや行きにくい町は「やや難」と記している（無理をするとワイルドな旅になってしまう）。

およそ5泊から

10泊程度の旅である。行きやすい町、好みの町を現地に行つてからその場で選んで回りたい。このコースは繰り返し4〜5回は楽しめるだろう——

オルヴィエー
トナルニ（やや難）→ト
ディー・スボレー



地図 中部山岳地帯の市壁の町をめぐる旅

ト↓モンテファルコ（やや難）↓スベツロ（やや難）↓アッシジ↓ペルージャ↓グッビオ↓コルトーナ↓アレツツォ↓モンテプルチアーノ↓ピエンツァ↓シエナ↓ヴォルテッラ（やや難）↓サン・ジミニャーノ↓ピストイア↓ルッカなどである。間に多数のいい町がある。このコースは、10年前は文学部国文科の駒木敏先生と、今夏は同哲学部の宮庄哲夫先生と回つた。原則的には、1人や2人の旅なら、ホテルなど予約をせずに、行き当たりばつたりで見つけたらいい。予約をするとそれに拘束されてしまう（しかし気になるなら、道中でスマホから予約すればよい）。旅に疲れた場合やその都市が気に入った場合、連泊して、そこでのんびり楽しむ多くの場合、泊まるホテルは見つから決めたらい。言葉は、ホテルや駅では中学2年生程度の英語で問題ない。時刻や支払い額などは重要なので、数字はメモ用紙を交換して誤解のないようにしたい。メーターのないタクシーの場合は（南イタリアによくある）、これで運転手のだましも予防できるだろう。出来ることから、泊まる場所は旧市街——歴史地区（「チェントロ・ストリーコ」）——がよい。



図3 ピエンツァの市門
ルネサンス教皇ピウス2世（1458～64）が登位してから建設した都市。厳格なルネサンス様式の大聖堂が建つ



図4 スポレートの大聖堂
13世紀建 スポレートは中世の面影を強く残した町。スポレート公国は6世紀から12世紀まで中部イタリア一帯を支配した



図5 スポレートの町中にあるバル

旧市街は、しばしば中世の市壁（図3）に囲まれており、そのなかにはドゥオーモや大聖堂がある。

原則的にこの旅で留意するポイントをあげると、「1日2都市」（できるだけ同じ町の夜と朝の両方を体験する）。がんばらない。昔は私も登山と勘違いして食欲にがんばってしまった（笑）。夏は暑いので、午後はホテルでゆっくり休養（昼寝）すること。そして、夕方になり、涼しくなったら、その日に泊まる町をぶらぶら散策し、夕暮れ時を味わい、食事を取る。8月は

夜9時でもまだ明るさは残る。図4「スポレート大聖堂」は、2012年8月7日の午後8時40分に撮った写真である。まだ明るさは残り、散歩は十分楽しめる時間である。バル（喫茶店）に立ち寄り、グラスで「プロセッコ」（発泡性ワインの一種）などを味わう（図5）。7月から8月の前半は多くの町で中世を再現した祭りや音楽祭、ジャズ・フェスティバルなどが催され、観光客を大いに楽しませてくれる。この時期はどこもバカンスを盛り上げるイベントが多く楽しい。

ただ注意すべきは、イタリアは「お客様中心」でなく「労働者中心」であることから、日曜日・祭日は電車・バスの本数が少ない。タクシー代も高くなる。美術館は日本と同様、月曜日は休館が多い。しかし、地方では小さな町でも立派な美術館を備えている。これは地方に中心があつた時代の誇り高き愛郷心のなごりである。郷土の画家の作品を集め、地方の濃厚な様式を感じさせてくれる。基本的なガイドブックとしては『地球の歩き方』フィレンツェとトスカーナ』がある。

旅の心得や万一の事故の対応など、海外旅行の基本が書いてあり役に立つ（しかし、このガイドブックに記載されていない素晴らしい町がまだまだかなりたくさんある）。もつと詳しい案内書の紹介については、2016年出版されたばかりの拙著『地獄と煉獄のはざままで』（知泉書館）の第2部第14章を参照のこと。

プーリア州の ロマネスク教会の旅

ウンブリア州とともにプーリア州（南部イタリア）も宗教色の濃い地域である。このプーリア州を中心に南イタリアのロマネスク教会をまわる第2のコースは、やや玄人向けかもしれない。また、第1のコースのように、町と町が数珠つなぎのようにつながっておらず、交通の便が悪く、一日で回れる範囲が狭い。よくあることだが、場所によつては、バスが一日2本程度しかないのだからあまり当てにできず、タクシーのお世話にならざるを得ないかもしれない——ところが、そのタクシーが町に1台もないことがある。それが、南イタリアのプーリア州を中心と



図6 アンコーナのサンタ・マリア・デッラ・ピアッツァ教会（1210～25）
聖母に捧げられた清楚で美しいユニークなファサード（正面）



図7 大天使ミケーレの町モンテ・サンタンジェロ
プーリア州北部のマンドローニアの近くにある高台の石灰岩の町。5世紀にミケーレ（ミカエル）がこの洞窟に姿を見せたと伝えられ巡礼の町となった

するロマネスク教会の旅である。プーリア州は、イタリア半島を人間の脚や長靴にたとえると、アキレス腱にあたるところである。この地域には素晴らしいロマネスク建築様式の教会が多数存在する。それは海岸線（アドリア海）に沿って中部イタリアのマルケ州のアンコーナ・ロマネスクのサンタ・マリア・デッラ・ピアッツァ教会（図6）・サン・チリアーコ大聖堂）まで続く。プーリア州は、観光的には奇抜な円錐形の屋根をもつ家屋群のアルベロベッロが代表格かもしれないが、実

はここは、ロマネスクの美の世界である。ロマネスク教会は都市の喧噪を忌避してうまれた面が強い。例えば、日本の観光ガイドブックには今のところ記載されていない町モンテ・サンタンジェロ（図7）は巡礼の町であり、宗教色の濃い、白亜の町である。プーリア州にはこのような思わぬインパクトを与える町が数多く存在し、奥の深さを感じさせる。イタリアでは、フランスもそうだが最も美しい村々のシリーズがドライヴ旅行者のためにガイドブックになつて紹介されている。

フランスのヴェズレーのサント・マドレーヌ聖堂（文学部哲学科の林克樹先生と同行）（ここで夕べに歌われる《莊嚴ミサ曲》が素晴らしい！）と同様に、プーリア州とその周辺には心を落ち着かせるロマネスクの美が散在する。それも気品のある、明るいが静謐なロマネスク世界がしびれ魅力を放つ。夕べの祈りの時間に訪れると、重厚な石造りと半円アーチのもと、静謐な澄んだ宗教色感動に触れることがある。まさに、宗教絵画を「美術館」ではなく、また、宗教音楽を「コンサート・ホール」ではなく、「教会」で味わってこそ、本当の美に触れたといえよう。以下、プーリア州のロマネスクの教会を少し示す――バーリのサン・ニコロ教会（図8）、ビントントの大聖堂、ルーヴォ・ディ・プーリアの大聖堂（図9）、バルレッタの大聖堂、モルフエッタの旧大聖堂（図10）、ブリンディジのサン・ベネデット教会（図11）。さらにアブルッツォ州やモリーゼ州やマルケ州に目を向けるとときりがないだろう。

どうぞ、自分の足で一步一步踏みしめて進む中世イタリアのタイム・スリップの個人旅行をお楽しみください。



図9 ルーヴォ・ディ・プーリアの大聖堂
私はプーリア州の中部にあるカステル・デル・モンテからの帰路によりやくここに立ち寄った。かなり不便な所にあるこの大聖堂に出会えたのは、この旅の最大の収穫であった



図8 プーリア・ロマネスクの粋のサン・ニコラ教会（バーリ）
ゴシックがダイナミズムと大衆性となると、ロマネスクは静謐さと高潔さに真髄がある



図11 ブリンディジのサン・ベネデット教会（1090年創建）
夕暮れ時に比較的高齢の女性たちが厳かに聖母の聖句を歌い、室内は敬虔な雰囲気包まれる



図10 モルフエッタの旧大聖堂
12世紀半ばに着工。内部空間も素晴らしいロマネスク様式。ファサードはすぐそばの港に向いている